

RTE-V853-IE

ハードウェア・ユーザズ・マニュアル

RealTimeEvaluator

目次

1. はじめに	2
2. 主な特徴	3
3. ハードウェア仕様.....	4
4. システム構成.....	5
5. 設置.....	6
6. ディップSWの設定.....	7
7. 表示LED.....	7
8. ユーザシステムとの接続.....	8
電源の入.....	8
電源の切.....	8
9. 注意事項	10
ユーザシステム接続時の注意	10
RTE - V 8 5 3 - I E の取り扱い.....	10
ホストとの接続確認	10
遅延時間に関する注意.....	9
N Q P A C K セットの消耗品	11
付録A . 内部コマンド.....	A1 ~
付録B . ユーザ・インターフェース回路.....	B1 ~

1. はじめに

RealTimeEvaluator-V853-IE(以下、RTE-V853-IE)はNEC製のRISCマイコンV853用のインサーキットエミュレータです。エミュレータ専用チップを使用することで透過性の高い、小型、軽量の製品となっています。

ディバグモニタはGHS社のMultiと京都マイクロコンピュータ社のPARTNERの2種を用意し、ユーザの環境に合わせ選択できるようになっています。共に、Windows3.1の環境で動作します。

ホストシステムは、上記ディバグが動作する環境を有したPC98シリーズまたはDOS/V機で、RTE-V853-IEとの接続は、専用のPCMCIA カードまたは、それぞれのデスクトップPC用のインターフェイス用カードを使用します。

本製品には下記のものが付属します。最初に付属品の確認を行なってください。

1.RTE-V853-IE本体	1個
2.RTE for Windows Set Up Disk	1枚
3.ユーザーズマニュアル(1式)	1冊
4.GND用クリップ	1個

以下は本製品を使用する上で必要なものですが、標準付属品ではありません。

- 5.RTE-PS01:電源
- 6.NQPACK Set
- 7.インターフェースキット (インターフェースカード&ケーブルセット)

以下のいずれかが必要です。

 - ・PC Card インターフェースキット
 - ・PC98 Desk Top PC 用 インターフェースキット
 - ・DOS/V Desk Top PC 用 インターフェースキット
- 8.ディバグ

以下のいずれかが必要です。

 - ・GHS C + Multi + Midasサ-バ
 - ・PARTNER/Win

2. 主な特徴

2種のソースレベルディバグが選択できます。

GHS(GreenHillsSoftware)社のMultiと京都マイクロコンピュータ社のPARTNERの2種の高級言語ディバグをユーザは選択できます。

GHS社のMultiでは、C/C++を統合環境の下で、シームレスなディバグが可能です。一方PARTNERでは、GHS社及びNEC社(CA850)の両方のC言語をサポートしていますので、ユーザがツールの環境を自由に構築できます。

いずれのディバグも高級言語ディバグとしての十分な機能を備え、プログラム実行、ブレークポイントの設定、変数のインスペクト等の操作がソース上でのマウスクリックで行えます。

透過性の高いエミュレーション機能を有しています。

エミュレータ専用チップを使用することで、本来のV853の持つ機能に頼ることなくエミュレータの制御を実現しています。また、ほとんどの信号線はチップとの直結です。その結果、機能的にも電氣的にも透過性の高いエミュレーション機能を提供し、シングルチップモードを含む全ての動作モードに対応しています。また、リアルタイム実行はプロセッサの最高速度(33MHz)に対応しています。

十分なエミュレーションメモリを標準搭載しています。

V853が内蔵する128KBのROM,4KBのRAM,及び1MBの外部メモリ用のエミュレーションメモリを標準で実装しています。いずれの領域も0ウェイトで動作します。

リアルタイムトレース機能を搭載しています。

組み込みシステムのディバグで重宝するリアルタイムトレース機能を搭載しています。内部メモリへのアクセスサイクルを含む全てのサイクルをイベント設定に基づき、32Kサイクル分トレースできます。

ホストとの通信は専用のカードを使用します。

3種のカードを用意しています。PCカードはPCMCIA Ver2.1/JEIDA Ver4.2で規定されているType-2カードです。PC98シリーズ及び、DOS/V機でカードスロットを装備している機種に使用できます。それぞれのデスクトップ機では、Cバス及びISAバスに対応したカードが使用できます。

3. ハードウェア仕様

エミュレーション部

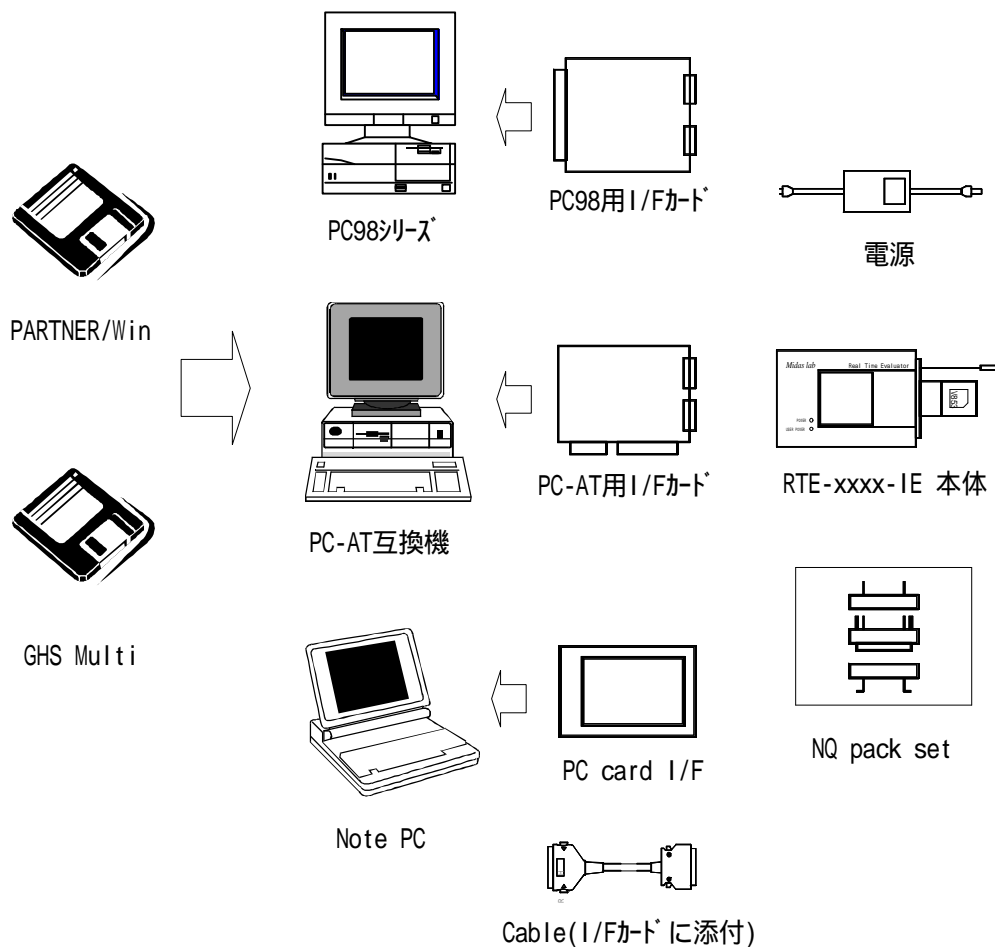
対象デバイス	V853
エミュレーション機能	
動作周波数	33MHz
クロック供給	外部 / 内部自動切り替え (内部:33.33MHz)
内部ROMエミュレーション容量	128KB
内部RAMエミュレーション容量	4KB
外部メモリエミュレーション容量	1MB
外部メモリマッピング単位	64KB
メモリマッピングの種類	RAM, ROM, GUARD, USER
ブレーク機能	
イベント設定	実行アドレス条件 14点 アクセスサイクル条件 4点
ステップブレーク	可
マニュアルブレーク	可
フェイルセーフブレーク	
ライトプロテクト	可
ガードエリア	可
トレース機能	
イベント設定	実行アドレス 2点 アクセスサイクル 3点
トレースメモリ	150bit × 32Kword
トレースディレイ	0 - 7FFFh
時間測定機能	
計測スタート	実行開始から
計測ストップ	ブレークまで
分解能	2 CPUCLK
最大測定時間	2 * 2 ³² CPUCLK
機能数	1 ch
内部RAMリアルタイム表示	1KB
端子マスク機能	RESET, NMI, WAIT-, HLDRQ
バスタイムアウト機能	可

ホスト& I F 部

項目	内容
対象ホストマシン	PC-98シリーズ DOS/V機
ディバグモニタ	GreenHills Multi (Windows 95) 京都マイクロコンピュータ PARTNER/Win (Windows 3.1)
インターフェース	PCカード Type2(PCMCIA Ver2.1/JEIDA Ver4.2以上), C/I ² S, ISA/I ² S
電源	A C アダプタ (in :100V out :+5V, 2A)

4. システム構成

本製品の全体のシステム構成を以下に示します。



備考：それぞれのPCには、使用するディバuggが動作する環境が必要です。

5. 設置

以下に設置の手順を示します。

1. インターフェースカードのインストール

各インターフェースカードのマニュアルを参照して下さい。

2. 《RTE for Windows》のインストール

《RTE for Windows》のマニュアルを参照して下さい。

3. 《RTE for Windows》の初期設定

(1) chkrte.exe を起動して、以下のパラメータで初期設定して下さい。

RTE :

I/F-1 : <<使用するインターフェースカードを指定

I/F-2 : <<必要に応じてIOポートを指定

詳しくは、《RTE for Windows》のマニュアルを参照して下さい。

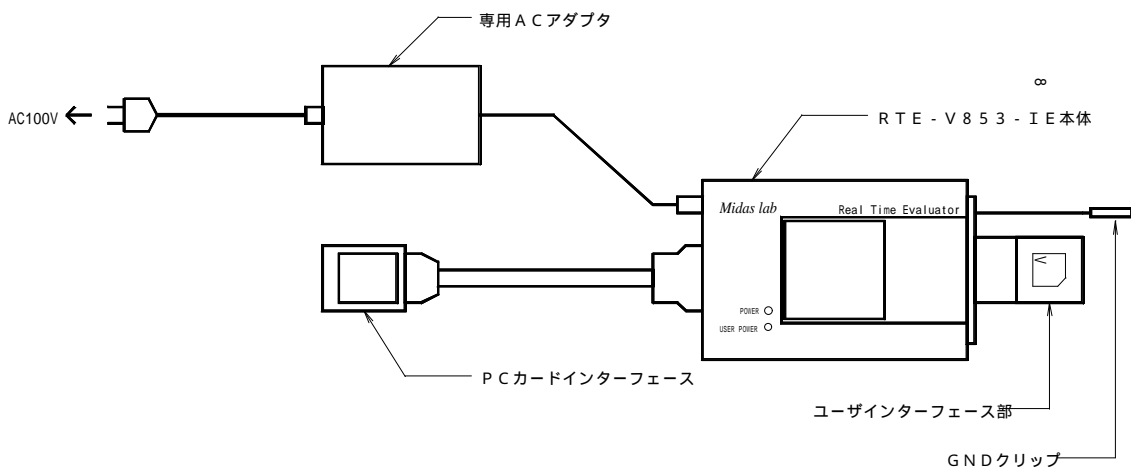
4. デバッグモニタのインストール

各デバッグモニタのマニュアルを参照して下さい。

5. ユーザシステムとの接続

本書の8章を参照して下さい。

以下に本システムの接続図（PCカードの例）を示します。



6. ディップSWの設定

RTE - V 8 5 3 - I E 裏面にあるスイッチは、エミュレーションモードを設定するためのものです。ユーザシステムの構成に合わせ、設定して下さい。

SW1	シンボル	機能	初期値
1	MODE0	[MODE2,MODE1,MODE0]	ON
2	MODE1	Single Chip MODE : [ON , OFF , ON]	OFF
3	MODE2	Romless MODE : [ON , ON , ON]	ON
4	PLLSEL	常にOFF	OFF
5	CKSEL	常にON	ON
6	CLKAUTO	V853へ供給するクロックの切り替えに使用します。	OFF
7	No use	常にOFF	OFF
8	Factory use	常にON	ON

[MODE 2,MODE1,MODE0]

スタンドアロンで使用する時のV 8 5 3の初期モードを指定します。

[PLLSEL]

常にOFFの位置でご使用ください。

[CKSEL]

常にONの位置でご使用ください。

[CLKAUTO]

V853へ供給するクロックの切り替えに使用します。

OFF : ユーザシステムが接続されている場合はユーザシステムのクロックを供給し、スタンドアロンの場合は内部から供給します。

ON : 常に内部より供給します。(内部クロックは6.66MHzを供給します)

[No use]

常にOFFの位置でご使用ください。

[Factory use]

常にONの位置でご使用ください。

7. 表示LED

本体上面のLEDは、以下の状態を示します。

POWER : RTEシステムの電源がONの状態です。

USER POWER : ユーザシステムに電源が供給されている状態です。

8. ユーザシステムとの接続

パーソナルコンピュータとRTE - V 8 5 3 - I E は、各インターフェースキットのマニュアルを参照して接続して下さい。

ユーザシステムへの接続は、添付されているN Q P A C K の技術資料を参照し、ユーザシステムに取り付けた後に、RTE - V 8 5 3 - I E を接続します。

【注意】

RTE - V 8 5 3 - I E 本体から出ているGNDクリップは、CPU部を接続する前に必ずユーザシステムのシグナルGNDへ接続して下さい。

電源の入

1. ホストのパーソナルコンピュータの電源を入れます。
2. RTE - V 8 5 3 - I E の電源ジャックにRTE 専用の電源を接続します。
3. ユーザシステムの電源をONします。
4. デバッグモニタを立ち上げます。

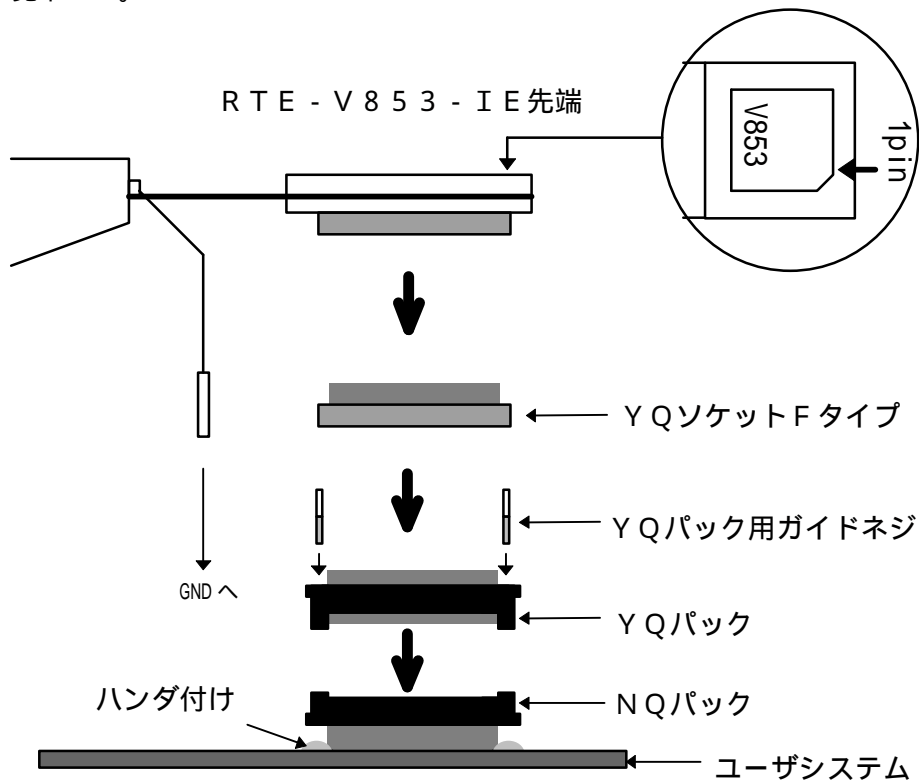
電源の切

1. デバッグモニタを抜けます。
2. ユーザシステムの電源をOFFします。
3. RTE - V 8 5 3 - I E の電源ジャックから電源を抜きます。
4. ホストのパーソナルコンピュータの電源を切ります。

【注意】

ユーザシステムへの接続は1番ピンの位置に注意して行って下さい。間違った状態では、接続している機器全ての故障の原因になります。

下記にユーザシステムとの接続図を示します。P A C K の詳細につきましては、付属の技術資料をご覧ください。





9. 注意事項

RTE - V 8 5 3 - I E を使用するにあたり、注意して頂く事項を以下にまとめます。

ユーザシステム接続時の注意

- 1) ユーザシステムの電源をOFFにした状態で使用しないで下さい。ユーザシステムの故障の原因になる場合があります。また、正常に動作しない場合があります。
- 2) ユーザシステムの電源をOFFする場合、原則としてRTEシステムも最初から立ち上げ直して下さい。RTEシステムがハングアップする場合があります。
- 3) ユーザシステム上でプロセッサが正常に動作しない状態（例えば、リセットがアクティブになっている等）では、RTEシステムは、正常に立ち上がらない場合があります。また、特定のコマンドでハングアップする場合があります。

RTE - V 8 5 3 - I E の取り扱い

【警告】

本体上面に露出しているデバイスは、高温になりますので手を触れないで下さい。触れた場合は火傷する恐れがあります。

【注意】

デバイス上面の電極は、内部の電源につながっていますので、導電性のものを接触させないで下さい。本体の故障の原因になります。

また、先端部底面の露出しているソケットのピン部分も通電時金属等に触れないようにして下さい。本体の故障の原因になります。

ホストとの接続確認

インストールして最初に、” chkrte.exe ” を実行して、ホストIFカード、及び使用するRTEシステムの選定と設定、及び、コネクションテストを実施して下さい。

詳しくは、” RTE for Windows インストール・マニュアル ” を参照して下さい。

遅延時間に関する注意

IE内のCPUとユーザシステムとは、ほとんどの信号が直結になっていますが（付録・B参照）、先端部までの配線長により、CPUを直付けした時に比較して、約3nS (typ.)程度の遅延があります。ユーザシステムでは、この遅延を見込んだ設計を行って下さい。

NQPACKセットの消耗品

(1) 100ピンYQソケットFタイプ

.....YQS-100SDF



(2) 100ピンYQパック

.....YQP-100SD

ガイドネジ付きです。



(3) 100ピンNQパック

.....NQP-100SD

**【備考】**

前記各ソケットは消耗品です。各ソケット共50回程度の着脱を目安に定期的に交換してご使用下さい。特にRTE-V853-IE下面の直ソケットは交換できませんので、頻繁に交換が予想される場合は、予め100ピンYQソケットを保護用に装着してご使用下さい。

- Memo -

RTE-V853-IE ハードウェア・ユーザズ・マニュアル

M582MNL02

作成 1996年5月2日 Rev1.00